

おまかせ
よかつたわ
ね



原作 三浦綾子
作・演出 イ・ジミ

CAST
須貝まい子

2015 5★22-FRI 24-SUN LE DÉCO 4

“三浦綾子が生き返ってきたよう”

——— 北海道旭川の三浦綾子記念文学館公演での大好評

演劇「本当によかったわね (原作:この土の器をも)」 三浦綾子の人生が描かれた初めての演劇

長い闘病生活に耐えた三浦綾子は37歳で結婚し夫・三浦光世とふたり、一間だけの小さな家で生活をはじめ。その後雑貨店を開き働きながら、愛を持続させることはいかに大切であるか、日常生活の中で人を信じる、愛することの重要性を感じ、「氷点」を執筆。朝日新聞社の1,000万円懸賞小説に投稿し、入選するまでの愛と信仰の日々を描く。結婚生活とは何か、家庭を築くとはどういうことか、夫婦はどうあるべきかを語りかけ、日常生活の中で、愛し信じるのが、いかに大切なことかを痛感させる演劇。腎臓結核を患った三浦光世と肺結核、脊椎カリエスを患った三浦綾子。体が弱かった三浦夫妻は聖書の教えに従いお互いを支え合い、愛し合いながら生きていく。時にお互いの手に、時にお互いの目になった彼らはいつもお互いへの感謝と愛を短歌を通して表現する。2014年10月、毎年三浦綾子記念文学館を愛して下さる地域の方々に感謝を込めて行われる三浦綾子祭にて公演。入院中のため三浦綾子祭に参加できなかった三浦光世さんのために病院の一角で小さな公演を捧げる。それが三浦光世さんが観た最後の演劇になる。3週間後の2014年10月30日、光世さんは綾子さんのそばに召された。

2015 5★22-24 SUN
FRI

5月	22(金)	23(土)	24(日)
11時			●
15時	●	●	●
19時	●	●	

★ チケット料金(全席自由席・税込) 3,000円 (当日3,500円)

★ チケット取扱 070-6455-9773

★ ネット予約 www.sugaimaiko.com

※ 開場は開演の30分前となります。

※ 未就学児童入場不可



CAST 須貝まい子

映画「石井のおとうさんありがとう」石井友子役でスクリーンデビュー
一人芝居「本当によかったわね」(原作「この土の器をも」)
三浦綾子記念文学館にて公演

音楽: 두번재달 映像: 김무세준 協力: tori studio

宣伝写真: 細見里香 デザイン: イヌニ

製作: sHIn corporation・MFパル 後援: 三浦綾子記念文学館

LE DÉCO 4 ギャラリー・ルデコ



★ TEL 03-5485-5188

★ 〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-16-3 ルデコビル 4F



三浦綾子

1922(大正11)年、北海道旭川市生まれ。17歳から7年間、小学校教師として軍国教育に献身したため、戦後に罪悪感と絶望を抱いて退職。その後、結核で13年間の療養生活を送る。闘病中にキリスト教に出会い、洗礼を受ける。1959年生涯の伴侶・三浦光世と結婚。1964年、朝日新聞の懸賞小説に「氷点」で入選し作家活動に入る。一貫してキリスト教の視点で「愛とは何か」を問い続け「銃口」、「塩狩峠」、「道ありき」など数多くの小説、エッセイを発表した。1999年召天。「氷点」の舞台となった

旭川市に見本林には、三浦綾子記念文学館があり、数多くの資料が展示されている。

氷点

小説が出版され、1966年以降国内外で映画やドラマ化された。若尾文子、浅野ゆう子、飯島直子、石原さとみなど当時を代表する実力派俳優たちが多数出演、常に話題となる。辻口病院長夫人・夏枝が青年医師・村井と逢い引きしている間に、3歳の娘ルリ子は殺害された。「汝の敵を愛せよ」という聖書の教えと妻への復讐心から、辻口は極秘に犯人の娘陽子を養子に迎える。何も知らない夏枝と長男・徹に愛され、すくすくと育つ陽子。やがて、辻口の行いに気づくことになった夏枝は激しい憎しみと苦しさを感じる。殺人犯の娘という原罪を持ったまま生きていかなければならなかった陽子。一つの家族が不信と憎しみ、許せない心によって破壊されていく過程を描いた小説。